

発掘調査の概要

甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第157次）

甘樫丘は、飛鳥川の西岸にある標高145mほどの丘陵で、『日本書紀』には、皇極天皇3年（644）、この丘に蘇我蝦夷・入鹿親子が家を建てたことが記されています。遺跡は、丘の東南麓にある支谷のひとつに位置し、公園整備を契機として2005年度から継続的な調査を実施しています。2006年度の調査では、遺跡の中央にあった谷の東岸に築かれた7世紀前半の石垣を約15mにわたって検出し、この場所が7世紀の前半から末にかけて大規模な造成を繰り返しながら継続的に利用されていた様子が明らかになりました。今回の調査は、石垣がどのように続いていくのかを確認することと、遺跡東辺部の状況を明らかにすることを主な目的としています。

調査の結果、石垣についてはその南端を確認し、2006年度の調査と合わせて全長約34mにわたるものであることが明らかになりました。さらにこの石垣は、全体が一連のものではなく北から23mのところまで東に曲がっていたものを、南側にさらに土盛をおこない10m分の石垣を新たに加えていることがわかりました。この石垣は、7世紀の中頃には谷とともに大規模な造成によって埋め立てられており、この場所はその後平坦地として利用されます。

今回の調査ではこのほかにも、石組の溝をめぐる石敷きや、50点をこえる土師器・須恵器が出土した大型の土坑、須恵器の坏に蓋をかぶせて埋めた埋設遺構、石組溝、建物跡など時期の異なる多様な遺構を確認し、複雑な土地利用の様子を知ることとなりました。

（都城発掘調査部 次山 淳）



石垣の検出状況(北西から)